

## 応用力学研究所共同研究集会

橋本, 俊也  
広島大学大学院生物圏科学研究科

<https://doi.org/10.15017/1526123>

---

出版情報 : 九州大学応用力学研究所所報. 145, pp.59-65, 2013-09. Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 応用力学研究所共同研究集会

橋本俊也\*<sup>1</sup>

(2013 年 5 月 28 日受理)

## Research Workshops in the Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University

Toshiya HASHIMOTO\*<sup>1</sup>

E-mail of corresponding author: [thasimt@hiroshima-u.ac.jp](mailto:thasimt@hiroshima-u.ac.jp)

### Abstract

Research workshops related to the material cycling in the coastal sea, which were conducted from 2000 to 2013 in the Research Institute for Applied Mechanics, Kyushu University, are reviewed.

**Key words** : *material cycling in the coastal seas, red tide, hypoxia*

### 1. はじめに

2000 年から 2012 年まで 13 回九州大学応用力学研究所で行った沿岸海域における物質循環に関する共同研究集会に関するレビューを行う。

### 2. 第 1 回「瀬戸内海の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時: 2000 年 12 月 8 日 (金) 12:50~

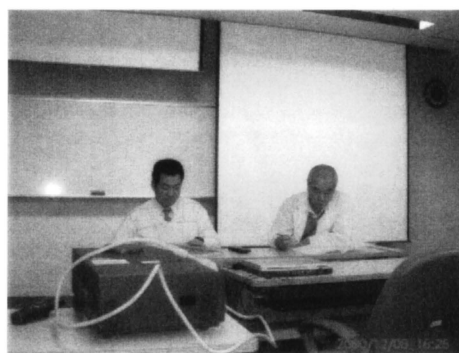
12 月 8 日 (金) 16:30

発表 8 題 (1 題あたり 20 分)

柳先生の指示により、瀬戸内海の低次生産に関する研究集会を実施することになった。人選は橋本に一任された。武岡英隆教授(愛媛大学)、門谷茂教授(香川大学、現北海道大学)など、現在では考えられない豪華メンバーが集結した。通常の学会発表と異なり、各自の研究課題について参加者全員で議論することを目的とした。物理、化学、生物など多分野の研究者により活発な議論が行われた。発表終了後に、約 30 分間総合討論を行った(写真)。

半日の日程で、あわただしい集会であった。特に 1 題あたりの発表時間が短く(20 分)十分な議論が出来なかった。夜の懇親会において、次年度について話し合わせ、1) 2 日間(1 日目午後から 2 日目午前)の日程とする、2) 1 題あたりの発表時間を 30 分以上とする、3) 総合討論を 60 分以上行う、

などのことが決定された。第 1 回目ということで、日程調整や機器の準備などにいろいろ不備もあったが、その後につながるという意味では有意義な集会であったと思う。



\*1 広島大学大学院生物圏科学研究科

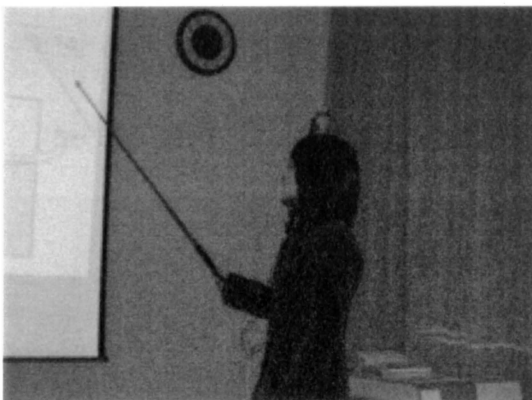
### 3. 第2回「瀬戸内海の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時:2001年12月21日(金)13:10～  
12月22日(土)11:30

発表 7題(1題あたり35分)

前回の反省をもとに、1題あたりの発表時間を長くし、討論時間を充実させた(発表20分, 討論15分)。林美鶴助手(神戸商船大, 現神戸大学准教授)の博士論文に関する発表が行われ、多くの参加者から意見が出され、予備検討委員会や公聴会にむけて有意義なものになった。また、橋本の指導学生(広島大学, 博士課程前期2年)による修士論文に関する発表が行われた(写真上)。この研究集会での発表を目標に研究指導を行ってきており、なんとか発表・討論に耐えることが出来た(写真下)。学生にしてみれば、これほどのメンバーの前で発表を行うのは相当のプレッシャーであったと思うが、良い経験になったと思う。ここでの質疑内容をもとに、修士論文研究を充実させることができた(この内容は後日、水産海洋研究に掲載された)。

この集会には、応用力学研究所の松野教授, 市川准教授, 清水助手(現中央水産研究所), 鬼塚院生(現瀬戸内海区分水産研究所)なども参加し、活発な議論が行われた。総合討論では、瀬戸内海の栄養塩起源に関する今後の研究方針が議論された。この研究課題については、「瀬戸内海の有機汚濁機構に関する研究」(瀬戸内海保全協会, 代表者:柳 哲雄, 2002-2004年度)として、この集会のメンバーを中心に実施された。



### 4. 第3回「瀬戸内海の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時:2002年12月10日(火)13:10～  
12月11日(水)11:30

発表 8題(1題あたり30分)

今回より、武岡教授, 門谷教授が不参加となった。一見和彦(NEDO フェロー, 現香川大学准教授)が参加することとなった。2000年に発生した有明海の色落ち現象が社会問題になっていた時期であり、はじめの3題は有明海関係の内容であった。事前に発表内容が公開されていたこともあり、有明海に関する研究者や漁業関係者が多く参加された(写真)。しかしながら、漁業関係者による質問は研究集会には不向きな内容(政治・行政的な問題提起など)が多く、質疑応答に時間がかかってしまった。

懇親会には、九州大学総理工, 広島大学生物圏科学などの学生が多く参加するようになった。当時の学生には、川口修(現広島県水産海洋技術センター), 屋良由美子(現国立環境研究所), 藤家亘(現海洋プランニング株式会社), 渡慶次力(現宮崎県水産試験場)などであり、彼らは、現在も海洋関係の研究現場で活躍している。



## 5. 第4回「沿岸海域の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時:2003年12月10日(水)13:10～  
12月11日(木)11:30

発表 8題(1題あたり30分)

多くの研究者に参加してもらうため、研究集会題目を「瀬戸内海」から「沿岸海域」に変更した。今回より、藤井直樹(広島大学、現佐賀大学)が参加することとなった。鬼塚剛(水産大学校、現瀬戸内海水研)、川口修(広島大学、現広島県水産海洋技術センター)、藤井直樹の博士論文に関する発表が行われ、多くの参加者から意見が出され、予備検討委員会や公聴会にむけて有意義なものになった(写真)。

この頃より研究集会の様子が変わってきたと記憶している。これまでは、各自の研究テーマを様々な分野の研究者が議論・理解し、今後の研究の進め方を考えるものであったが、この頃より、学会のシンポジウムのように完成された研究テーマの発表会のようになってしまった。当初の目的から離れ、ある意味で残念ではあるが、物理、化学、生物など多分野の研究者・学生が一堂に会して発表・議論する意味では、有意義な集会であった。



## 6. 第5回「沿岸海域の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時:2004年12月 6日(月)13:05～  
12月 7日(火)12:00

発表 11題(1題あたり30分)

発表題数は最大の11題となったが、なんとか1題あたりの時間を30分としてプログラムを作成したため、これまでよりもあわただしい日程となった。発表のほとんど(7題)が学生によるものとなり、修論発表会あるいは春の学会の発表練習のような会になってきた。懇親会では、各大学の学生が親睦を深めたようである(写真上)。

発表者以外の参加者(聴衆)の減少が目立った会であった(写真下)。



## 7. 第6回「沿岸海域の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時:2005年12月 6日(火)13:05～  
12月 7日(水)11:30

発表 8題(1題あたり30分)

プログラム上は2日間の日程であったが、多くの参加者からの要望で2日目の発表予定の2題を1日目に変更し、1日の日程で行った。2004年4月に国立大学が独法化し、教

員が多忙になってきたことを実感した。この集也会も6回目になり、少々マンネリ化してきたようであった。このあたりで一端終了するという話もあったが、せっかく続けてきた貴重なコミュニティをなくすのはもったいないので、次回は新メンバーの追加などを行い再出発することとなった。(デジカメを忘れたので写真はない)。

## 8. 第7回 「沿岸海域の低次栄養段階をめぐる物質循環」

日時: 2006年12月 5日(火)13:20～  
12月 6日(水)12:30

発表 9題(1題あたり35分)

前年の反省を基に、新たなメンバーに参加を依頼した。瀬戸内海の藻場を研究している谷本照己(産総研)、瀬戸内海の栄養塩環境を研究している樽谷賢治(瀬戸内水研、現西海区水研)が参加することとなった。また、2年間アメリカ留学で不在であった、郭新宇(愛媛大学)も参加することとなった。1題あたり35分とし(それまでは30分以内)、各研究テーマについてしっかりと議論できるようにした。また、全発表が教職員によるものであり、非常に興味深い研究集会となった。1題目の発表終了後に柳先生が別の会議で退席するというハプニングもあったが(写真上、懇親会および2日目は出席)、参加者の協力で無事終了することができた。1日目の夕方には恒例の懇親会を行ったが、学生が参加していないため、これまでに比べ出席者が少なかったが(写真左下、9名)、その分有意義な討論を行うことができた。



## 9. 第8回 「沿岸海域の物質循環と環境保全」

日時: 2007年12月 4日(火)13:10～

12月5日(水)12:10

発表 12題(1題あたり30分)

集会題目を「沿岸海域の低次栄養段階をめぐる物質循環」から「沿岸海域の物質循環と環境保全」と変更することとなった。今回より、山田真知子(福岡女子大)が参加することとなった。発表題数は12題と前年より増えたため、1題あたり30分となった。藻場・干潟に関する発表が3題あり、この内容をベースにして「海域環境再生(里海創生)社会システムの構築」(科学技術振興機構、代表者:柳 哲雄, 2008～2012年度)という大型プロジェクトが採択され、この集会のメンバーを中心に実施された。研究会および懇親会の参加者が多く、有意義かつ賑やかな集会となった(写真)。



## 10. 第9回 「沿岸海域の物質循環と環境保全」

日時: 2008年12月 9日(火)12:50～

12月10日(水)11:50

発表 15題(1題あたり25分)

今回より、渡慶次力(宮崎水試)、児玉真史(中央水研)、

徳永貴久(中央水研), 齋藤光代(愛媛大)が参加することになった。柳先生の「来るものは拒まず, 去る者は追わず」の指示もあり, 発表数が大幅に増加した。また, 各発表者の指導学生も多く参加し, 学生を含めて活発な討論が行われた(写真上)。なお, この年に柳先生が還暦を迎えられ, 1日目発表終了後に有志メンバーによるささやかなプレゼント(日本酒)の贈呈式が行われた(写真下)。



## 11. 第10回 「沿岸海域の物質循環と環境保全」

日時:2009年12月 1日(火)12:50~  
12月 2日(水)14:45

発表 20題(1題あたり25分)

この集會も記念すべき第10回を迎えることとなった。今回より小野寺真一(広島大学)が参加することとなった。学生や研究員の発表申込みが多くあり, 発表題数が大幅に増加した。この集會の目的である「しっかりとした有意義な討論」を行うために, 1題あたりの時間を25分確保した。そのため, 2日目に昼食をはさんで, 午後にも発表を行う日程とした。長時間の日程と多岐にわたる分野の発表が行われるようになったため, これまで橋本が1人で行ってきた座長を数名(多田, 一見, 林)で分担してもらうこととした。発表時間厳守のため, 石井技術職員によりプレゼンタイマーソフトが導入さ

れた(写真上)。懇親会には, 教職員や学生のみならず, 関連企業(国土環境, 現いであ)の社員も参加し, 懇親会は就活の場ともなった(写真下)。



## 12. 第11回 「沿岸海域の物質循環と環境保全」

日時:2010年12月14日(火)13:00~  
12月15日(水)12:00

発表 19題(1題あたり20分)

今回より山ロー岩(香川大)が参加することになった。研究プロジェクト「海域環境再生(里海創生)社会システムの構築」とジョイントするため(参加者の旅費を研究プロジェクトで処理するため), この研究集會が「里海創生」と関連したものであることを示した「開催趣旨」をプログラムに追加することとなった。また, 2日目の午後に同プロジェクトの検討会議を行うこととしたため, 研究集會は2日目の午前中で終了することとなった。発表題数が多かったが, 1題あたりの時間を20分と短縮することとした。質疑・討論時間が短くなったため, 通常の学会発表のようになってしまった。同プロジェクトとジョイントしたため, その関係者の多くも研究集會に参加し, 活発な議論が行われた(写真)。



### 13. 第12回「里海創生のための沿岸海域の環境保全」

日時:2011年12月 6日(火)13:10~  
12月 7日(水)11:20

発表 15題(1題あたり20分)

前回同様、研究プロジェクト「海域環境再生(里海創生)社会システムの構築」とジョイントすることとなり、それをより明確にする(この研究集会をプロジェクトの研究成果とする)ため、集会題目を「里海創生のための沿岸海域の環境保全」と変更した。前回より発表題数は減少したが、1題あたりの時間を20分とし、時間的に余裕のある日程とした。しかしながら、口頭発表時間が超過し質疑・応答の時間がほとんど無くなってしまふ発表が目立った。せっかく、これだけのメンバーが参加しているのだから、質疑・応答を十分行うことが大切なことである。該当者には、懇親会において「発表準備をしっかり行ってから参加することを心がけてもらいたい」と注意がなされた。

この頃より、愛媛大を中心に非正規研究員の発表が増えてきた。この研究集会には旅費予算も付いており、できるだけ非正規研究員や学生の旅費援助を行っている。この研究集会で成果を発表することで、今後の所属先確保に繋がることになることを希望する。

学会のメーリングリストや応力研ホームページにプログラム

を掲載したこともあり、多くの聴衆が参加するようになった(写真)。休憩時間などには、参加者どうしが交流する様子が見られた。研究発表だけではなく、研究者間の交流の意味でも重要な集会になっていると感じた。



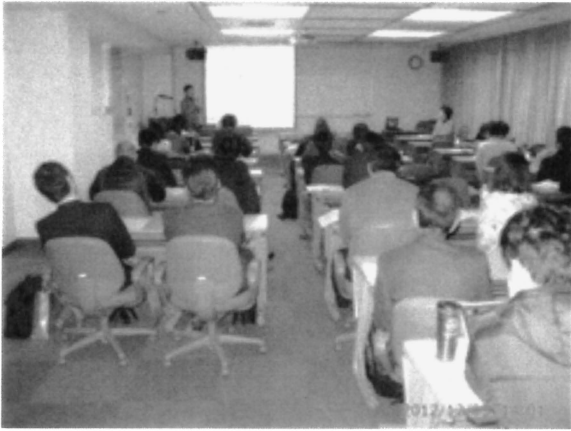
### 14. 第13回「里海創生のための沿岸海域の環境保全」

日時:2012年12月 5日(水)12:50~  
12月 6日(水)11:50

発表 17題(1題あたり20分)

この研究集会開始時に柳先生より「俺か橋本が辞めるまでこの集会は続ける」というお達しがあった。その言葉通り、これまで12年間1度も休むことなく実施してきた。2012年度末で柳先生が九州大学を退官されることになり、この研究集会も一端中止することとなった。最後にふさわしく、初期のメンバーである塚本秀史(弓削商船)、清水学(中央水研)なども参加し、活発な討論が行われた(写真左)。また、懇親会では2次会をセッティングし、有志のメンバー(16名)が参

加し、柳先生を囲んで様々な思い出話に花が咲いた(写真右).



3) 多くの関係者と交流したい(懇親会が楽しみ).

私自身にとっても、この研究集会が良い刺激であり、また



## 15. おわりに

このような集会が13年間続けてこられたのは、素晴らしいことである。参加者にとっては次の目的があったのでは？

1) 自分の研究に対する、柳先生のコメントをいただきたい。

2) 他分野の研究を理解したい(学会では質問しにくい内容も質問できる)。

外部資金獲得のきっかけともなってきた。終了するのは残念である。多くの参加者より、今後もこのような集会を企画してほしいとの要望が出された。せっかく12年間で構築してきた多分野の研究者間の絆であるので、何かの形で復活できるように考えていきたい。

九州大学応用力学研究所の藤井晴美さんや石井大輔技術職員には、毎年研究集会の準備作業や事務手続きを行っていただいた。参加者を代表して感謝する。